

上広瀬果樹組合

Kamihirose Kajukumiai

語り手 船坂正信

聞き手 山本真紀

企画 高山市

取材日：令和6年11月7日

果樹栽培に関わるまで

高山の農林高等学校の農業科を卒業しました。卒業した後は、夏にバイトに行っていた測量設計の会社に就職したんです。就職して2年くらいした時、本社で働いておったけど、父親が脳卒中で倒れたので、高山に戻って来ました。それから、桃の栽培をしながら高山支店で勤めました。桃栽培は、それからずっとやっていて、来年で50年になります。

父親は、脳卒中で倒れてから20年間、右全部が動かない半身不随だったので、果樹のことはいろんな方に教えてもらって、勤めながら桃だけを作っていた。そのうち、だんだん桃だけでは面白くなってきて、りんごを作り始めました。桃だけを作っていた時は、測量会社で秋冬の間だけ使ってもらいました。でも、だんだん、りんごの木が大きくなってくると、仕事に行くとれんのよな。そうやって測量会社はお断りしました。その後、冬はいろいろバイトに行きました。なかでもタクシーのドライバーは20年やりました。

上広瀬果樹組合 ～量より質 良いものを作ろう～

あと2年すると上広瀬果樹組合が設立してから70周年になりますね。組合は、昭和32年2月18日にできたの。組合ができた当時は梨が多かった。当時、上広瀬に大林千明さんおおばやし ちあきという方がいて、梨を作ってみえました。そして、僕の親たちは、大林さんやそのまわりの人達が作った梨を預かって売りに出た。でも、そのうち「梨じゃ駄目だ、これからは桃だ」と桃を作り始めたのがきっかけで、組合ができました。現在組合に入っているのは、34軒しかないんですけど、設立当時は54軒ありました。

組合では「量より質」を大切にしています。たくさん作れば手が回らないので、良いものは採れません。少なくとも、良いものを採ろうという基本でずっとやっています。高速道路がまだ通っていなかった時は、国道41号で名古屋や岐阜へ桃を運ぶ。すると市場から苦情の電話が来るのよ。当時の組合長さんは、すぐ車で市場へ行って、現場の様子を見て、話を聞いてくるのよ。で、「こういうふうやで駄目やぞ」と現物を見せて組合員に教えて、桃の質を揃えてきました。そうやって先輩方に教えてもらったことを、次の者に教えながらやってきました。

やっぱり、せんてい剪定とか、技術的なことの講習会はやるんやよ。講習会には、1軒で2人くらい参加する。目揃えだと家族の方がみんな来る。お茶を準備しとるけど足らんくらいだね。

この果樹組合は「助っ人の会」っていうのがあるんや。そこで、枝を切る剪定とか、草刈りとか、消毒とか、困った時に頼むと、誰かがやってくれる。骨折したから1か月でいいで頼むとか、そういうのができる。そういう助け合いは、すごく大事だなと思いますね。剪定作業によって果実の質が左右されて、1年間の収入が決まるので、手の早い人で上手な人を皆さん頼みます。



船坂 正信

昭和32年1月14日生

プロフィール

岐阜県立斐太農林高等学校農業科卒業

上広瀬果樹組合役員（45年間）

岐阜県指導農業士（18年間）

国府町教育委員

農業共済評価委員

JA国府支店運営委員

農地利用最適化推進委員

地元では神社総代、寺総代責任役員も務める。

理由はわからんけど、僕の果樹園の桃やりんごの玉が人より大きいのよな。なぜか実が大きい。どっかが違うんやと思う。土地が肥えているのか、作業の何かが違うのか。実の数を減らすと実は大きくなるけど、収穫する前に割れる。ちょうどっていうのが大事。僕に作業を頼む人は「お前のやつやってくる、来てくろ」って言ってきます。

実は、地球温暖化でだんだん収穫が早くなっているのよ。僕が作り始めた頃は、桃の収穫が8月の14、15日のお盆の頃から始まったんやわ。今は、7月の下旬。やっぱり温暖化の影響はすごいですね。りんごを作っている人は、9月下旬とか10月の初めに取れる品種を作ろうとすると難しい。桃やりんごの収穫の時期を見極めて、計画的にやらないといけない。

栽培や技術に国境はない

今、この地域の桃の9割ほどは、全国地方発送ですが、まだ宅配がなく個人売りがない時は、名古屋の市場に出荷に行っていて、みんなが顔なじみでした。市場の方やら、みんな仲良くなって良かったなことは、当然たくさんある。

山梨県とか長野県とか県外の人たちともずっと仲良くしておるんで、そのへんは良かったなと思う。やっぱり県外の方と仲良くしておると、技術的なことも習える。大阪の岸和田市にも果樹組合がある。で、ある時、岸和田の果樹組合へお邪魔したら「この品種がいいですよ。袋をかけるに、こういう袋のほうがいいですよ」とか、いろいろ情報もらったりしました。

僕はいつも「売ることは自由やけど、栽培や技術には国境がない」って言ってます。国境がないってのは、国じゃなくて、県の境のことだね。「みんなでやりましょう」ってのは、基本の考え方です。

やっぱり毎年同じ人が桃やりんごを買われるんですよ。常連さんっていうか。「今年のやつ良かったな」って言われると、これからも頑張って作ろうってなります。一番苦しいのは、自然相手なんで、雨が多いとどうしても桃の糖度が落ちる。そういう時は正直にお話をして、今年は糖度が少ないと伝えてます。でも、そう伝えてもほとんどの方は、いつもと同じ値段で買ってくれます。

28年ほど前かな、県庁の方から宮内庁へ桃を送ってくださいって依頼されたことがありました。その後も、天皇陛下が岐阜県内にみえるので、桃を送ってもらえませんかと言われて、送りました。実際に天皇陛下が桃を食べられたかどうかわからんけど、送るときは役員みんなで、1箱を選ぶのにとっても緊張しました。



りんごの花

後継者不足と対策

困っとることは、生産者が高齢化していること。上広瀬果樹組合の中で、後継者がいて、今後やっていこうかなというところは、34軒中3軒くらい。かなり深刻な状態です。それをどうクリアしようかというのが問題になっています。市役所の農政の方と一緒に、東京とか大阪へ就農フェアに行ったことがあるんですけど、果樹をやりたいという人がなかなかいません。静岡県出身のご夫婦

の方が、桃とりんごの作業に1週間ずつ来てくれたことがありますが、りんごの作業に来ていた時に、ちょうど運が悪く台風が来たんです。台風が去った後に、りんごを拾う姿を見て「やっぱり僕たちはできません」となりましたね。その後、ほうれんそうで研修を受けとる子が、やっぱり果樹をやってみたいということで、僕のところへ来てくれました。苗木を植えて育てようとする、5年間は収入がゼロ。その間、収入がゼロだとかわいいで、僕の畑を作れば良いし、初めから農機を買うのも大変やで、僕のやつも全部貸せるし、なんでも聞いてくださいと言いました。自分の作ったものを自分で売れるのでどうやろうと話をしましたが、かなり悩んだ末、結局は法人で果樹をしているところへ行けました。

高山市に移住してきていただいて、現在の畑を作ってもら。元々やっていた者が指導もするようにしてもらいたいと思うんやけどな。今ある畑で、使ってもらえる畑があるからね。そして、高山市の空き家に住めば、どろどろの服のままでも通える。そういうのがいいんじゃないんですかって、市役所には言うんですけどね。大きい空き家やと住むのに寂しいで、小さい空き家を市役所のほうで紹介してやれば、空き家対策にもなるじゃない。そうして、就農する人が増えれば、農地も荒れることもなくなるので、一石二鳥って話をしておるんやけど、なかなか難しいみたいです。

桃は、とにかく、食べて甘ければオクケーなんです。雨が降ると、糖度は1度ずつ下がって、1日晴れると一気に糖度が回復するんです。そして、小さい桃より大きい桃のほうが値段も高いけど、よく出る。その理由は簡単な話。小さい桃でも大きい桃でも、種子の大きさはだいたい一緒。だから、小さい桃ってあんまり食べるところがない。でかい桃ってぎょうさん食べるところがある。だから値段が高いんですよって言うと、みんな、はあ、そうですねって納得されます。

自分で作った桃やりんごで加工品を作るって喜びは、やっぱり全然違います。一応、僕も販売許可は受けています。今は地元の保健所に届けば大丈夫だけど、僕の時は厳しかったので消費者庁に届けましたね。

自分の作ったりんごは、久々野の道の駅でジュースにしている。そうすると、他人のりんごは混ざらないんです。そして、高山市森下町にある洋菓子工房では、アップルパイの原料として、僕の作ったりんごが使われていますね。あとは、自分のところで、自分が食べる用にジャムを作る。桃もりんごもジャムにします。

果樹組合でまとまって加工品を作ることはないですね。そういうのも話はしたんですけど、いつまで続くかってこともわからないのでね。久々野みたいなアップルパイを作ったりするグループが、ここでもできれば良いですけど。この辺の方は高齢化してるんで、なかなかね。

感謝の気持ち～支え合い～

小学生の体験学習は、ずっと受け入れてます。花の時と、実がちょっと大きくなった時と、収穫の時と年に3回来てもら。最後にこどもたちがその体験活動をまとめて発表してくれるので、その話を聞きに行きます。



りんごの実

農業っていうのは自然相手なので、良い商品や自分が満足できるものができる、喜びになります。そういうのは児童、生徒さんはもちろんですけど、多くの方にも伝わっていくといいかなと思ってます。高山の人は、国府の桃はおいしいってみんな知ってますね。国府の桃はおいしいで、もっと高山で桃を食べようよみたいなことがあるといいね。

果樹組合に入っておって、残念ながら辞めた人もいます。組合ができて、そこで技術を学んで、みんなで広めていったのに、「俺が栽培したんやで、もっと自由じゃなきゃ」という考えの若い人もいますのよな。僕たちは、先輩とか年寄り師匠から、いろいろ教えてもらった。だから、そのお返しをしようということで次へ渡そうとしているのに、自分は自分でいいんじゃないかと言う。若い方だと今までの歴史や流れがわからないので、余計にそう思うのかもしれないけど、それでは良くないと思う。

上広瀬果樹組合には、組合長、副組合長、会計とか、いろんな担当が5つあるんですけど、20代前半から役をやっとるんで、もう40年以上になるな。ちなみに組合長は、平成29年からやっていますね。飛騨全域の果実協議会の会長は飛び飛びで4回目です。飛騨の会長やると岐阜県の果実部会の副会長になる。ちなみに会長さんは岐阜市の方で柿を作っている方。飛騨は副会長なんです。それはつきものなんです。

果樹組合もそうですけど、神社とかお寺とか、農協の役とか、市役所の役とか、いろんな役をやらせてもらうけど、みなさんのおかげでできたと常に思っております。一人でやろうと思ったってできない。感謝の気持ちを持っていれば、人はついてくれる。協力もしてくれる。それがやっぱり原点かなと思います。人によっては大きな役をもらうと、ちょっと胸を張る方もみえるけど、そういうふうじゃなくて、自分一人で育ったわけじゃなく、周りの方の協力があって育ってきたんですよ。

煩惱は108つありますからね。小っちゃいお子さんでもそうやね。気に入らんとやんちゃこいて、バタバタするね。一緒やで、みんな。大人やで我慢しとるだけで。表面上は我慢しとるだけ。寺の住職も煩惱を持っていますから、心配したことはない。大切なのは、やっぱり感謝の気持ち、「ありがとうございます」です。



大きく実った飛騨桃